

東京バッハ合唱団 月報

[第 671 号] 2018 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 671

May 2018

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 116 回定期演奏会へのご案内

バッハ「第 2 年巻」カンタータの多様性

大村 健二 (団員)

定期演奏会の開催が迫りました。何かと話題の多かった大曲《ロ短調ミサ曲》を終え、その後の半年間、われわれは当合唱団の本領たる教会カンタータの仕込みに勤しんでまいりました。《ロ短調》が、バッハの音楽生涯の総決算であったとすれば、一つ一つのカンタータは、バッハの日々の生活の中の、与えられた各主日・各祭日の存在理由、その信仰課題に対する真剣な解答だったはずで

す。こんな観点で、今回の個性豊かな 4 つの佳品の、それぞれの輝きに注目してみたいと思います。

第 116 回定期演奏会

曲目：J. S. バッハ (日本語演奏)

- 1) カンタータ第 178 番《主 われらに いまさずば》
- 2) カンタータ第 176 番《抗い また怯むは 心の常》
- 3) カンタータ第 177 番《呼びまつる 主イエスよ》
- 4) カンタータ第 1 番《あしたに輝く 妙なる星よ》

(5 月 12 日土曜日、14:00 開演。武蔵野市民文化会館小ホール、三鷹駅・吉祥寺駅などからバス、または三鷹駅から徒歩 13 分)

*

4 曲のカンタータのうちの 3 曲が、バッハのライブツィヒ就任第 2 年目のカンタータ群 (第 2 年巻) に属するもの、残りの 1 曲 (第 177 番) も 7 年の後に、この第 2 年巻を補遺することを意図して作曲されたものであったことなどには、先月号月報で触れた通りです。

バッハが、この第 2 年目のカンタータ制作において企図したことは、コラール・カンタータの形式で年間の全レパートリー (合計 60 曲ほど) を作曲・初演し、ストックとすることでした。「コラール・カンタータ」とは、ある特定のコラールの定旋律や歌詞をカンタータ全体の基盤としたものを指します。

この時期のコラール・カンタータ連作は、《あしたに輝く 妙なる星よ》(BWV 1) が、第 39 作目として初演されたのを最後に途絶えてしまいました。構想の 3 分の 2 ほどの時点で中断してしまった理由は分かりません。一連の台本作者であり、かつバッハの貴重な協働者であった人物 (不詳) の、突然の死去が原因かとも見られます。今回の演目の場合、上記の連作中断の後、第 2 年目の仕事の最終作として作曲された《抗い また

怯むは 心の常》(BWV 176) は、女流詩人ツィーグラの編んだ歌詞台本に拠り、末尾にだけ終結コラールが置かれていますので、これはコラール・カンタータの部類には入りません。他の 2 曲、BWV 178 と BWV 177 はいずれもコラール・カンタータです。

*

1. 第 178 番《主 われらに いまさずば》

Wo Gott der Herr nicht bei uns hält BWV 178

- ・用途：三位一体節後第 8 日曜日
- ・歌詞：台本作者不詳 (ヨナスのコラールに基づく)
- ・初演：1724 年 7 月 30 日

第 2 年巻コラール・カンタータ連作の第 8 作目にあたる曲です。基本コラールの作者は、改革者ルターのヴィッテンベルク大学での若き同僚であり、終生の友であったユストゥス・ヨナス (1493-1555) ですが、この日の指定聖句 (マタイ 7: 15-23、偽預言者を警戒しなさい) に結び付けて、コラール各節を配置し (第 1 曲、4 曲、7 曲)、あるいは詩節のあいだにつなぎの創作詩を挿入して聖句の意図を説明し (第 2 曲、5 曲)、あるいは数節をまとめて自由詩のアリア (第 3 曲、6 曲) へと改編した台本の作者は、知られていません。

(歌詞の表記で、太字としたものがコラールからの引用。この習慣はいつに始まったのか知りません。当団ホームページの「歌詞 [上演用] 公開」を参照)

ヨナスのコラールは、詩編 124 篇をかなり忠実に敷衍したものですので、否定の条件文が並ぶ、込み入ったテキストの理解のためには、いちど旧約聖書のこの箇所をお読みになることをお勧めします (以下に一部引用)。この詩編の同箇所からは、同土ルターもまたコラールを創作しています。一昨年 (第 114 回) 定演をお聞きになられた方は、《かたえに 主いまさずば》(BWV 14) の歌詞の内容に似ていることにお気づきになられたかも知れません。表題からして酷似している

月報 5 月号 CONTENTS

お・た・よ・り (p.4)

- ・《ロ短調ミサ曲》DVD を視聴……西村 清志 (後援会)
 - ・4 月号の月報を読んで……安藤 能成 (団友)
 - ・いつも着実に月報が届くたび……宮田 光雄 (団友)
- 創立 56 周年<コンサートと懇親会とバザー> (p.4)

のは、当然です。詩編は「主がわたしたちの味方でなかったなら / わたしたちに逆らう者が立ったとき / そのとき、わたしたちは生きながら / 敵意の炎に呑み込まれていたであろう」と始まります。ヨナスは、ルターの臨終のときにも、彼に寄り添っていたのだそうです。二人は、同箇所から作出したお互いのコラールについて、どんな会話を交わしたのでしょうか。

音楽は、器楽の鋭い付点リズムの前奏に始まります。明かに干戈・軍馬の描写です。何との戦(いくさ)か? 元となった旧約詩編での〈敵〉、コラール作者ヨナスの目の前の〈敵〉、作曲者バッハの(あるいは、時代の)解釈のなかでの〈敵〉、と少なくとも3つの時限(古代/16世紀/18世紀)での戦が重なっていますが、2018年にこの曲に接するわれわれは、われわれの世界の今のことにも思い当たっているのかも知れません。この普遍性がバッハの魅力です。

もちろん、このカンタータが作曲された目的(用途)は、教会暦の三位一体節後第8日曜日に指定された聖書箇所(既出)を、バッハの時代の〈敵〉を名指しながら絵解きすることです。多くの解説書にあるとおり、18世紀の前半、ドイツのプロテスタント教会にとっての〈偽預言者〉とは、それと名指すことはありませんでしたが、勢いを増す啓蒙思想に圧された理性偏重の風潮のことでしょう。第6曲の、〈いざ黙せ ゆらぐところよ〉の“ところ”の原詞が Vernunft (理性)であることは、前号月報でも触れました。つづく終結コラール(第7曲)中にも〈信仰に抗う人のところ 虚し〉の“ところ”として現れます。啓蒙主義の影のなかで“理性”という単語に出会うと、理性と信仰との対比が明確に意識されるようにも思います。

*

2. カンタータ第176番《抗い また怯むは 心の常》 Es ist ein trotzig und verzagt Ding BWV 176

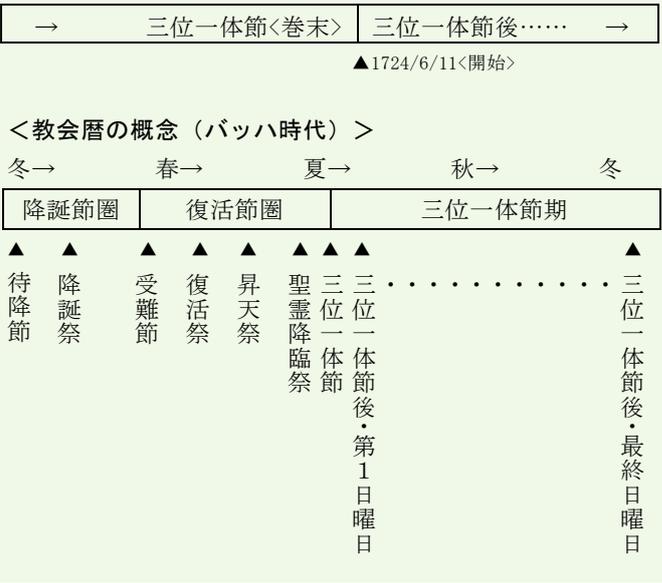
- ・用途：三位一体節
- ・歌詞：マリアンネ・フォン・ツィーグラ台本
- ・初演：1725年5月27日

第2年巻カンタータの巻末に置かれた作品。バッハの個人的な事情によって、彼のカンタータ年巻が三位一体節後第1日曜日から開始されたことにも、前号で触れました。カレンダーが一巡して、三位一体節で年度末を迎えたのです(右掲の概念図)。

しかしバッハの時代の、教会暦の本来のすがたとしては、復活祭から50日目の聖霊降臨節(ペンテコステ)をもって、半年を無事に終えたことを盛大に祝う、ということに意味がありました。三位一体のうちの第3位格「聖霊」が降ったところで、翌週の、「父」なる神、「子」なるキリストとの一体を覚えるこの大事な祝日からは、教会暦の後半が始まります。

この祝日に当てられた指定聖句(ヨハネ 3; 1-15)は、ニコデモ(ユダヤ人の議員であり、教師でもある)とイエスとの対話をとおして、「聖霊」の働きに目を向

<バッハの第2年巻(1724年6月~25年5月)>



けさせようとしします。同時に読まれる使徒書簡(ローマ 11; 23-36)には「神の富と知恵と知識のなんと深いことか」とあります。クリスマスや受難節、復活節といった大きな節日の集中する教会暦の前半に対し、夏から秋にかけての後半では、落ち着いて、人生の霊的な側面に注目することを促しています。前曲の《主われらに いまさずば》(BWV 178)がそうであったように、またつづく《呼びまつる 主イエスよ》(BWV 177)も、暦の上でのこの時期に置かれており(前者が、三位一体節から8週後、後者が4週後)、いずれも、心の内側に焦点が当てられています。

*

3. カンタータ第177番《呼びまつる 主イエスよ》 Ich ruf zu dir, Herr Jesu Christ BWV 177

- 用途：三位一体節後第4日曜日
- 歌詞：アグリーコラのコラール全節
- 初演：1732年7月6日

初演の時期が、このたびの公演の他の3曲(1724年7月~25年5月)とは大きく隔たっています。この頃までには、すでに3,4年分のカンタータ・ストックが出来上がりつつあり、各主日・祝日礼拝のための上演義務は、ほぼそこからの再演で果たせるようになったからだと思われます。余裕ができたためでしょうか、バッハの関心は教会の外にも向けられるようになりました。1729年3月にコレギウム・ムジクムの指揮者に就任し、今日多くのバッハファンに愛好される傑作を次々に世に出しつつ、音楽仲間たちとの多様な協演を楽しむようになりました(《2つのヴァイオリンのための協奏曲》BWV 1043などを思い出していただければ、バッハの昂揚した精神が想像できます)。一方、翌30年8月の記録として、ライプツィヒ市参事会がバッハの職務怠慢を非難して減俸処分を決定、とあるように、市当局やトーマス学校などとの関係は悪化していきま

では、教会作品の分野はどうなったのか。驚くべきことに、この時期に生み出されたカンタータは、数こそ少なくはなりましたが、その透徹した味わいには凄みを感じるほどです。たとえば、一昨年冬、第114回定演で、前出の第14番とともに取りあげたカンタータ第140番《目覚めよと呼ばわる 物見の声高し》(1731年11月初演)などを思い出していただければ、納得いただけるはずです。

そして、われわれのカンタータ第177番《呼びまつの主イエスよ》も、まさにその円熟と深みのなかで成立した名曲なのです。その事情は、第140番の成立と同様、年巻(=ストック)の欠けを補うことでした。第140番が、稀にしかめぐってこない三位一体節後の第27日曜日(通常年では第24,25日曜日が最終)のための音楽として新作されたのに対し、第177番は、バッハが並々ならぬこだわりをもって開始した、第2年巻「コラール・カンタータ」連作の補遺として作られたものです。

教会暦カレンダーはイースターを基準として組み立てられますが、そのイースターが満月の都合によって毎年の日取りを変えるために、日付の固定している祝日(12月25日のクリスマスなど)が、どの曜日に当たるかは、年ごとに事情が異なります。7年前の三位一体節後第4日曜日は、1724年7月2日に巡ってきました。たまたまこの「7月2日」が「マリアのエリサベツ訪問の祝日」の固定日と重なったために、日曜礼拝でのカンタータの主題は、慣例によって後者が優先されて、《わが魂 主をあがめ》(BWV 10)が後世に残されました。ルカ伝のマリアの讃歌(ドイツ語訳)を元にした立派なコラール・カンタータです(定旋律は、グレゴリオ聖歌のマニフィカト旋律に由来)。

同教会暦日のための音楽を、コラール・カンタータの形式で作曲する機会が、7年後に巡ってきたわけです。この日のための作品は、もちろん前年の同暦日に、バッハの就任早々の仕事(第3作目)としてストックされていましたし(BWV 24)、一昔前のヴァイマルでの作品(BWV 185。終結コラールは、まさに、われわれのカンタータ BWV 177の基本コラールと同曲)も、この同じ日に再演されたことが分かっています。が、彼は、やり残したコラール・カンタータ連作を補って、新たに創作する道を選んだのです。

コラール作者、ヨーハン・アグリーコラ(1494-1566)は、ルターと同郷(アイスレーベン)の出身、ヴィッテンベルク大学で、そのルターの許で教育を受けた神学者ですが、後に彼から離れました。ベルリンでペストに罹患して死去。バッハが使用したコラールは、この1曲のみです。

独奏ヴァイオリンと2本のオーボエによる、スケールの大きな協奏曲風な前奏を聴くだけで、われわれは、神の愛の宇宙にあって、必死に呼びかけている人間の小さな姿を思い浮かべることができます。



■フラ・アンジェリコ「受胎告知」(1432-3) コルトナ・ディオチェサーノ美術館

4. カンタータ第1番《あしたに輝く たえなる星よ》 Wie schön leuchtet der Morgenstern BWV 1

- ・用途：受胎告知の祝日
- ・歌詞：台本作者不詳(ニコライのコラールに基づく)
- ・初演：1725年3月25日

基本コラール(カンタータ曲名と同名)の作者はフィリップ・ニコライ(1556-1608)です。バッハは彼のコラール旋律と歌詞とがよほど気に入ったと見えて、この第1番をふくめ6曲の作品で使用していますが、この愛好はドイツ人一般に見られるようで、バッハ当時はもちろん、19世紀の旧バッハ全集編纂のころの人びとの心をも捉えていたようです。このカンタータがバッハ音楽の代表として、真っ先に(第1番として)とり上げられ、そのままBWV番号の劈頭に置かれた、といった事情には既に触れました。

同じニコライのコラールを、われわれは既にカンタータ《目覚めよと呼ばわる 物見の声高し》(BWV 140)の基本コラールとして、何度か耳にしています。こちらが「コラールの王」と讃えられるのに対し、第1番の基本コラールは「コラールの女王」です。ローマ教会以来の、聖母=天の女王=暁の星、の連想に符号する見事な呼称です。

受胎告知の祝日に読まれるルカ伝の聖句(1;26-38)の場面は、たとえば上に掲げたフラ・アンジェリコの画面(部分)、マリアの前に天使ガブリエルが現れて「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」と告げます。マリアは驚いて、読んでいた聖書を膝に落とします(これは聖書には書いてありません)。同じアンジェリコのフィレンツェ・サンマルコ美術館の名画が有名ですが、画集で知ったこの作品も素晴らしいので載せました。

ニコライの歌詞では、プロテスタント神学にのっとり、聖母マリアよりも御子イエスの方に焦点が当てられます。冒頭合唱は、牧歌的な管楽器と独奏ヴァイオリン(いずれも2組)を主役とした前奏に導かれて、天空の一角にまず、明けの明星のごとく、定旋律がソプラノに置かれて登場します。マリアの胎にあるキリストへの呼びかけでしょうか。以下は、お楽しみに。

西村 清志（後援会員、小樽市在住）

《ロ短調ミサ曲》のDVD（第115回定演記録）を視聴しました。

今はすべてがアナログからデジタルへ移行していく“新産業革命”のただ中にいるわけですが、それにとともに、アナログ文化の一翼を担っていた宗教が、急速に吸引力を失っています。そんな中でキリスト教を中心とする音楽や建築は、むしろ以前より輝きを増しているように、ぼくには思えます。

デジタル文化では、様々なヴァーチャルな世界が人気がないのは、デジタルのヴァーチャルほどに複雑でも動きや変化もなく、いわば単純すぎるからだと思うのですが、しかし、宗教にはデジタル・ヴァーチャルでは創出できない、ヒューマンであたたかい世界があって、音楽や建築は理屈抜きにそれを示してくれるので、アナログ離れの現代人にもアピールするのだと思うのです。

今回の《ロ短調ミサ曲》も、冒頭の合唱が始まるや否や、聴衆はヒューマンで壮大なヴァーチャルな世界に引き込まれ、分断・対立・混乱の極みにある今日の状況の向こうに、もしかしたら「平和」で「平安」があるのでは、という希望に浸ることができたのではないのでしょうか。

大村先生の指揮にはそんな世界を確信しているところから来る“自信”に溢れた、堂々たる、まさに“平和の伝導者”のような風格が漂っていました。

最近の若年層があまりモノにこだわらなくなっているのは（特に日本で顕著なようですが）、ぼくには「足るを知る」をごく自然に実践しているように映ります。だからといって人生への意欲は結構旺盛で、彼らが今日のさまざまな分野での革新のエネルギーの中心になっているような気がします。

4月号の月報を読んで

安藤 能成（団友、世田谷中央教会牧師）

大村先生ご夫妻の文章を読んでバッハに少し近づくことができました。私が小遣いで最初に買ったLPはバッハのマルコ受難曲でした。1枚物で安かったからです。マタイは全曲ですから手が出ませんでした。そしてイースターオラトリオ。そんなわけで理解も乏しい人間ですが、今回の月報を読んで再び興味が湧いてきました。健二さんの系統的な解説と恵美子先生のとくにBWV177の解説〈ただ 恵み〉だけなのだ、というフレーズが昨年の宗教改革500年と絡んで興味を持ちました。どちらかというと「聖書のみ、信仰のみ」というところに強調点が置かれやすいところですが、昨年改めて思わされたことが「恵みのみ」ということ

でしたので。

まだ演奏会の招待状を申し込んでいませんけれどもできるだけ都合をつけたいと思います。

宮田 光雄（団友、政治学・政治思想史）

いつも着実に「月報」が届くたびに、その弛まざる歩み——それを支える熱意と努力、皆様の協力と一致、志の一貫性に打たれ、頭を垂れる思いになります。

過日は、その輝かしい成果である《ロ短調ミサ曲》のDVDを御恵投くださり有難うございました。目下、それにお返しすべき何も用意できていませんが、ようやく一時期遅れとなった「宗教改革500年」記念出版のための草稿を完成し、出版社に渡しえたところです。8月末刊行予定で、出ましたら早速お届けいたします。（新教出版社『ルターはヒトラーの先駆者だったか——宗教改革500年、回顧と展望』）

上よりの御祝福を念じつつ（2018.4.18）

東京バッハ合唱団 創立56周年記念

コンサートと懇親会とバザー

合唱団の創立記念日（1962/7/1）が巡ってきます。

多くの皆さまに支えられて、
演奏の内容は、ますます充実、と好評ですが
財政面は、半世紀前と変わらずの火の車。
パッとお集まりいただき、お励まし頂ければ幸いです。
バザーの献品、お買い上げ、大歓迎!!

6月30日（土）

会場：日本キリスト教団・荻窪教会

- バザーとリハーサル……13:30（開場）
- 懇親会的コンサート……14:30～16:00

<曲目>

J. S. Bach

- ・教会カンタータ（日本語演奏、各曲とも抜粋）
カンタータ《主 われらに いまさずば》BWV 178
カンタータ《抗い また怯むは ころの常》BWV 176
カンタータ《呼びまつる 主イエスよ》BWV 177
カンタータ《あしたに輝く たえなる星よ》BWV 1
- ・ヴァイオリン独奏
《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番》ト短調 BWV 1001

<入場無料>

<演奏>

ヴァイオリン独奏：西川 豪
器楽アンサンブル：

Ob 桜井哲雄（予定）、Vn 中川典子、VC 岡山ひかる
ピアノ伴奏：宮野尾史子
合唱と斉唱：東京バッハ合唱団
指揮：大村恵美子

主催：東京バッハ合唱団

共催：日本キリスト教団荻窪教会

〒167-0051 杉並区荻窪 4-2-10、電話：03-3398-2104